

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（経）甲第8号	氏名	宮崎勝年
論文審査委員	主査	深浦厚之	
	副査	菅家正瑞	
	副査	杉原敏夫	
<p>題名：グローバル化における日本医薬品企業の経営戦略に関する一考察</p> <p>論文審査の結果の要旨</p> <p>本論文は次のように構成されている。</p> <p>序章 本論文の目的と構成</p> <p>第一章 グローバル化と日本医薬品企業</p> <p>第二章 日本医薬品産業の特質</p> <p>第三章 日本医薬品企業におけるグローバル化の戦略パターン</p> <p>第四章 日本医薬品企業の経営戦略</p> <p>第五章 本研究の結論と今後の課題</p> <p>序章において問題意識と目的が示される。医薬品市場の低成長、外資系医薬品企業の国際展開、国際的な医薬品承認基準の統一化などの環境変化の中で、今後、日本医薬品企業が成長するための経営戦略が問われている。本論文はその方向性を示すことを目的とする。</p> <p>第一章では日本医薬品企業のグローバル化への取組みについての現状が検証され、日本国内の規制緩和、日本医薬品市場における外資系医薬品企業のプレゼンス、日本医薬品企業の海外展開という3つの軸に沿った議論が行われる。</p> <p>第二章では、日本医薬品企業の特質を医薬品の製品特性、製品開発プロセスの特殊性という観点から考察し、グローバル展開が遅れていた背景を探っている。特に、日本医薬品企業が1970年代までは外資系企業の技術導入を中心に研究開発を行ってきたという歴史的背景の重要性を指摘している。</p> <p>第三章ではまず厚生労働省「医薬品産業ビジョン」を踏まえ、一般的な日本医薬品企業のグローバル化への戦略を考察し、さらに、グローバル企業への展開を積極的に志向した製薬会社3社を選び、トップマネジメントの考え方や海外展開の経緯などに詳細な検討を加え、日本医薬品企業のグローバル化戦略を3つに類型化した。</p> <p>第四章では、海外事業戦略についての先行研究を踏まえながら、前章で得られた3つのタイプの適用可能性について論じ、日本医薬品企業の取りうるグローバル化戦略に関する具体的提言を行っている。</p> <p>第五章では論文全体の要約今後の課題が述べられ、同時に日本医薬品企業のグローバル化戦略についての指針が示されている。</p>			

本論文の貢献は次の3点である。

第一に、日本医薬品企業の国際化戦略の現状を、文献資料（研究書・公的機関報告書・報道資料など）を幅広く渉猟して詳細に検討している点である。日本の医薬品産業は創薬プロセスの技術的特殊性や規制・制度などのため、興味深い産業構造を持っている。そうした産業特性の中で筆者自身が業務を通じて体得した問題意識が文献資料から得られた情報と有機的に結びつけられており、日本医薬品産業の全体像が明確に説明されている。特に、報告書や報道資料については過去約30年にわたる期間の資料が丹念にフォローされており、その努力は高く評価されるべきである。

第二に、産業的特殊性や現状を前提に、武田薬品工業・万有製薬・中外製薬のグローバル化戦略を検証し、グローバル化戦略の雛型として自力型・被合併型・参画型という3つの類型化を提示し、それぞれの戦略のメリット・デメリットが実態に即して詳しく論じられている。この類型化は先行研究にケーススタディの成果を重ね合わせることで筆者自身が創案した独自の類型化である。

第三に、日本医薬品企業の今後のグローバル化にとって、上記3種類のうち、自力型よりも被合併型・参画型が有利であることを論証した点があげられる。グローバル化を模索する場合、自社にその体力が備わっているかが意思決定の鍵となることが多いが、本論文は、必ずしも市場プレゼンスが高くない企業であっても戦略の選択によってはグローバル展開が十分に可能であることを示唆している。グローバル化を視野に入れる企業に対してとりうる戦略メニューを示すことで、経営意思決定プロセスの高度化に資する。

他方、以下のような問題を指摘することができる。

第一に、本論文で示されたグローバル化戦略の類型化が経営学にとって一定の貢献をなすことは疑いないが、なお概念の精緻化の余地は残されている。自力型・完全子会社型・戦略提携型・参画型という類型は、企業グループの構成・形態に着目した類型化にもなっている。他方、先行研究の多くはむしろ戦略パターンに着目した類型で従来と異なる観点による立論には斬新さが認められるが、ケーススタディの結果に議論が制約された印象はぬぐえない。本論文が採用した方法論・観点が有効な方法論であることが一層の説得力をもって論証されていれば本論文の価値はさらに高まっただろう。しかし、筆者自身、この点を改善点として正しく認識していることは口頭試験で確認された。

第二に、本論文は筆者の勤務経験から裏づけられた問題意識に基づいており、論文の筆致には筆者の経営戦略への強い関心、日本医薬品企業の国際化戦略の遅れに対する危機感が窺える。これらのことは本論文の今日的意義を強調する要素であるが、主観的記述が混在してしまうおそれがあり、本論文もそうした危険から完全に逃れられてはいない。幸い、分析の帰結や骨格に重大な影響は生じてはいないが、記述に関する若干の配慮不足が惜まれる。

しかしながらこれらの指摘は本論文の博士論文としての学術的価値を損ねるような性格のものではない。以上により、本論文が企業の意思決定およびグローバル化戦略に関する研究の高度化に資することを審査委員は全員一致で認め、博士（経営学）の学位に値すると判断した。